
おおかみかくし ~ The story of another world ~

you

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おおかみかくし The story of another
World

【Nコード】

N1888Y

【作者名】

you

【あらすじ】

「おおかみさま
嫦娥町」

山間にあるその町には、おおかみさま大神様と呼ばれる神様が祀られていた。これは、大神様とそれに関する者たちの、不思議なお話。

竜騎士07様作「おおかみかくし」の二次創作です。

それ系が嫌いな方、かなちゃんはこの子じゃない！等、かなりのキャラ崩壊が予測されますので危ないと感じられたら、速やかに戻

るを押すことをおすすめします。

この作品を通して、おおかみかくしを知って頂ける、プレイして頂けると嬉しく思います。

m (_ 。) m

Prolog(前書き)

はい、突発性小説見切り発車症候群の影響です

おおかみかくしをプレイして、とある分岐がないことに気がつきまして……。

じゃあ自分で創ればいんじゃないね？

という結論に達しました

なるべく原作の世界観を壊さない様にしたいのですが、どうしてもオリジナルが入るので、キャラ崩壊が予測されます。

生暖かい目で見守ってください。。。

P r o l o g

違う。私が望んだのは、こんな世界じゃない。

真っ黒の空間。周りが全く目視出来ないほどの暗闇。

目を閉じて、ふわふわと浮かんでいるモノは、少女の声でそう呟いた。

この空間には、地面という概念が存在せず、浮かんでいるという表現が正しいのかはわからないが。

ずっと……ずっと『彼等』を見守ってきた。私が望む世界を作り上げてくれると信じて。

でも、もう……我慢できない。私はこんな事を望んではいなかった……！ ならば、全てを終わらせる。それが、『彼等』を生み出した私の責任。

そのモノは、両手を重ね、目の前を掬うように、ゆっくりと持ち上げる。その手の中に、微かに光る欠片が現れた。

刻は満ちた。赤く輝く月と共に。足りない力は大地から少し借りたために、今年の八朔は不作になるでしょうけど……『彼等』を滅ぼすのであれば、もう関係のない事ね。

少しずつ、欠片の光量が増していく。

ゆっくりと目を開けて、言う。

さあ、終わらせましょう。全てを。

両手から閃光が走り、その姿はかき消えた。

P r o l o g (後書き)

わかる人にしかわからない！

な、なるべく始めての方でも分かりやすいように書いていきたいです。。。

始まりの朝（前書き）

しばらく説明が続く予感……。

始まりの朝

「うー、今何時だ……？」

朦朧とした意識の中、枕元に置いた目覚ましを、手探りで探す。目覚ましの形は、かなりオードソックスなタイプで、二つの鐘のがついているものだ。その鐘の片方に指が触れる。

ようやく見つけた目覚ましを、仰向けの状態で目の前に持ってきた。

「うええ……、まだ起きるまで30分もあんのかよ。もうひと眠りし」

ポロリと、俺の手元は嫌だと言わんばかりに、目覚ましは逃げ出し、自由落下を始める。

それは端から見れば一瞬の出来事。

しかし俺には、スローモーションで迫ってくる目覚ましは、数秒にも、数分にも感じ

ゴッ！！

見事に、鐘の部分にヘッドバットをかまされた。

「~~~~~っ!?!?」

本気で痛いときは、声が出せないって言うけど、あれはマジだと体感した。

悶絶する俺。気が付けば、土下座をするような格好でおでこを押

さえていた。

「うおおお……死ぬるうう……」

時間と共に痛みがマシになり、その分、言い様のない怒りが沸き上がってくる。そして、その矛先は当然、目覚ましへと向かう。

「ったいわばけえっ！」

それを掴み、放り投げる。わりと全力で。

勢いよく飛んでいった目覚ましは、机に当たり、ガシャンと音をたてて碎ける。

「はっ！？ し、しまったあああっ！」

だが、時すでに遅し。

目覚ましを慌てて拾いに走るが、それは只の鐘がついた物体へと成り果てていた。

「ううう、最悪だ……」

一人暮らしの俺にとって、目覚ましの重要度はかなりのものだ。あれがなければ、俺は一瞬で社会的信用を失うだろう。

……まあようするに、遅刻確定だと言うことだ。

時計がない状態で、今から二度寝などをしてしまえば……。

転校初日から、教師に目をつけられる可能性があるのは、さすがにいただけない。

俺は渋々、こんな早朝から、学校に向かう準備をするのだった。

俺の名前は九十九優理。しがない高校生だ。容姿は中の上くらいだろうと思う。

両親は、もういない。高校に入学してすぐくらいに事故で亡くなり、親戚の家に引き取られた。

だが、親戚の魂胆は最初からわかっていた。

遺産。

高校生にもなれば、それくらいの事は感じ取れる。

だから俺は、一人暮らしのできる所を探していた。親戚の手を借りず、一人で生きていくために。

そんな折、まさにうつつつけの話が飛び込んできた。

都心から離れた山間にある町、じょうがまち嫦娥町。

ここでは昨今、都市開発が進められており、今なお人口は増え続けている。

そんな情勢もあってか、1Kのアパートが、風呂・トイレ別であるにも関わらず、家賃二万円という破格の値段で、入居者を募集している、と。

もちろん俺は、即電話をかけ、大家さんに家庭の事情を話すと、快く入居を許してくれた。

親戚には、遺産の半分を譲ることで無理矢理納得させ、嫦娥町にある高校に転入手続きをすませた。

こうして俺は、晴れてこの嫦娥町に引っ越して来ることが出来た

の
だ
っ
た。

始まりの朝（後書き）

さて、次からメインヒロイン達の登場……！？

転校生（前書き）

脳内プロットに基づいて書いております。
うん、またの名を思いつきとも言います。

そ、そんな目で見ないで！？（泣）

転校生

学校に行く準備をすませ、俺は時間潰しのためにテレビを見ていた。

『今年の夏は例年に比べ、気象の変化が激しく、八朔の生産量が大幅に減少しているため、嫦娥町では』

朝のニュースで、キャスターさんがこの町のことを心配している。そういえばこの辺りは、八朔の木がかなり大量に見受けられる。この町の特産品が何かなのだろうか。

そんな事を考えていると、ちょうどいい時間になっていたので、俺はテレビを消して、学校へ向かうことにした。

「えーっと、この角を曲がれば……お、見えた見えた」

手書きの地図とにらめっこしながら角を曲がると、正面に学校が見えた。

何を隠そう、俺は方向音痴だ。そのため、前日に学校までの道程を調べ、地図を書いておいたのだが……都会暮らしに慣れていた俺は、地図があるのにも関わらず、軽く迷ってしまった。

「はあ……、どうにかならんもんかねえ、この方向音痴は」

愚痴をこぼしながら、正門に向かって歩いていく。

「見るのは二回目だけど……このいびつな校舎は慣れないな」

この『私立嫦娥高等学校』は、かなり昔からある学校らしい。近年の人口増加に伴い、突貫で増築を繰り返したため、校舎がかなりデコボコしているのだ。と、転入手続きの際、校長先生に聞かされた。

「おおい！ 九十九！ こっちだこっち！」

声をかけられ、ふと周りを見渡すと、ムキムキマッチョな男性が立っていた。

「あ、鷺羽先生。おはようございます」

「なんだなんだ！ 朝から元気がないぞ九十九！ もっと元気よくあいさつしないか！」

言いながら、バシバシと肩を叩かれ

「って、痛い！ 痛いですよ先生！？ どんだけ力入れてるんですか！？」

「はっはっはっは！ 男ならこれくらい耐えて見せろ！」

この妙に暑苦しい人は、『鷺羽美幸^{わしうみゆき}』先生。

女性の様な名前だが、見た目はいかついマッチョのむつきむき君である。

手続きの際、この名前を見て、『女の先生かあ、可愛い人だといいなあ』なんて妄想していた分、紹介された時の落胆具合は半端で

はなかった。正直、詐欺だと思っわけですよ、はい。

「んん？ どうした九十九？ 変な顔して」

これからクラスの皆に紹介すると言われ、ついていつている最中に声をかけられた。

「い、いえ。なんでもないですよ？ あ、あはは……」

先生の悪口を思ってましたなど、口が裂けても言えない。

口にしたが最後、先生のぶつとい腕による熱い包容（またの名をヘッドロック）により、即刻、天に召されるだろう。それはもう世紀末覇者の如く。

「我が生涯に一片の悔いな……いやいやいや！ むしろ悔いしかないし！？」

「???? 何をぶつぶつ言ってるんだ九十九？ ほら、もう教室に着くぞ？」

どうやら少しトリップしている間に、教室に着いたようだ。

「じゃあ九十九、先生が先に入って説明するから、呼んだら教室に入ってきてくれ」

「はい、わかりました」

先生を見送ってしばらくすると、中から俺を呼ぶ声がした。

「よしっ！ 行くか！」

深呼吸して少し気を落ち着かせ、緊張しながらも俺は教室のドアに手をかけた。

俺が教室に入ると同時に、ドオッ！ と、爆発的な歓声が巻き起こる。

「な、なんだこれ……？」

これが女の子だけの黄色い悲鳴なら嬉しさが勝ったのだろうが、男女関係なく黄色い悲鳴をあげられると、嬉しさよりも呆けてしまう。

悲鳴をあげているのはクラスの半分くらいで、もう半分はその悲鳴に驚いたり、またかといったような呆れ顔をしている者と、様々だ。

だが、一人だけ、青ざめた顔でこちらを見ている女の子がいた。絹地の様にサラサラとした長い髪。百人が百人、美女だと答えるであろうその子は、こちらを見つめて固まっていた。

な、なんだろ……。俺、あんな美人さんに何かしたっけ……？ いやいや、そんな筈はない。だって、あんな綺麗な人は今まで一度も見たことないし……。

「九十九、自己紹介！」

「あ、は、はい！」

先生に急かされ、簡単に自己紹介をすませる。

「九十九優理です、皆さんよろしくお願いします！」

そしてまた歓声が爆発する。俺は何がなんだかわからないまま、促された席に座った。

「????」

頭の中が疑問符だらけのまま、淡々と授業は始まっていった。

「つ、疲れた……」

昼休み。俺は机に突っ伏していた。

最初の授業が終わり、休み時間に入ると、俺は即座に取り囲まれた。その後は、完全に質問攻めである。やれ、どこから来たのかだの、趣味は何だの、好きです付き合ってくださいだの、そんなやつより俺と突き合おうぜだの、それはさながらマシンガンの如く質問をぶつけられた。

それを、毎時間、授業が終わる度に、である。これで疲れない方がおかしい。

今はお昼、皆ご飯を食べなければいけないということで、ようやく嵐のような時間が過ぎ去ったのだ。

ふいに、コトンと机に何かを置く音がした。顔を上げると、机には缶コーヒーが置いてあり、机の隣には眼鏡をかけた男子が立っていた。

「お疲れ様、大丈夫？僕も転校初日はそんな感じだったから、気持ちよくわかるよ」

隣の席にストンと座りながら、声をかけてくる。

「ありがとう。えーっと……」

「あ、ごめんごめん！ 自己紹介がまだだったね。僕は九澄博士、くすみひろし九十九君と同じ転校生なんだ」

「九澄君も転校生なの？」

「うん、僕も五日前くらいに転校してきたばかりなんだ」

「五日前！？ めちゃくちゃ最近じゃん！？」

そうなんだ、と、頭をかきながら照れている様な感じで言う九澄君。

「席も隣同士だし、名字もなんだか似てるし、もしかしたら仲良くなれるかなって思ってた」

「こちらこそ、仲良くしてくれると嬉しいよ！ なんかあんなに囲まれると萎縮しちゃってさ？ すごい話し掛けにくかったんだよね」

「あはは！ その気持ちよくわかるよ！ あ、僕の事は博士って呼んでくれていいよ？」

「ん、わかった！ じゃあ俺の事も優理って呼んでくれない？」

「もちろん！」

意気投合し、しばらく談笑していると、バンっ！ と、教室のドアが開き、一人の女の子が九澄君に勢いよく飛び付いてきた。

「ヒロくうくん！ やつと見つけたあ！ んもう！ ボクを置いてっちゃうなんてヒドいよぉー！」

女の子は、言うや否や、博士の腕に抱き付く。

「い、五十鈴ちゃん！？ 優理が目の前にいるんだからそんなにくつつかないで！ 誤解されちゃうよ！？」

「あらあらあら、お二人はいつもらぶらぶじゃないですかあ」

「ちよっ！？ かなめさんまで誤解されるようなこと言わないで！？」

「誤解もなにも、ボクはヒロくんのことが好きなんだもん！ 全然問題ないよ？」

「い、いいい、五十鈴ちゃん！？」

何故か目の前で、ドタバタラブコメが始まり、どうしていいのかわからなくなる。

「すみません、優理くん。お騒がせしてしまって」

「あ、いえいえ。楽しそうで何よりです……？」

ペコリと頭を下げるもう一人の女の子につられて、思わずこちらも頭を下げる。

おっとりとした可愛い人だな、という印象をつける女の子だ。黒く長い髪の毛は、両肩の辺りで二つに纏められ、胸に流れている。

「ふふっ　ハカセくんとすずちゃんはいつもこんな感じなので、早めに慣れておいたほうがいいですよ？」

「そ、そうなんだ……？」

「ええ、そうなんです。あ、私は朝霧かなめ（あさぎりかなめ）といます。向こうでハカセくんにくつついているのは、すずちゃんです」

朝霧さんに教えられ、そちらに目を向けると、九澄君にくつつきながら、女の子が手を振っている。

「初めまして！　ボクは摘花^{つむはな}五十鈴！　五十鈴って呼んでね！　ユウくん！」

「え、あ、うん。よろしく……ね？」

ショートカットで、元気いっぱいな女の子にあいさつを返す。いわずもがな、美人である。野性味溢れるその魅力は、朝霧さんとはまた違った可愛さがある。

「朝霧さん、いつも博士と摘花さ　五十鈴さんはこんな感じなの？」

横から五十鈴だよ！　と、釘をさされ、慌てて訂正しながら、質問する。

「ふふふ、かなめでいいですよ。ハカセくんのお友達なんですから、私のお友達つてことにもなりますし。そうですね、いつもらぶらぶで、羨ましい限りです」

「かなめさんっ！ 九十九君にあることないこと吹き込まないで！？」

大変そうだな……、博士。

「んん？ ユウくんもなんだかヒロくんと同じ匂いにする……。でもでも、ヒロくんへのボクの愛情は変わらないんだからね！」

「わわっ！？ 五十鈴さん！！ 近い近い！」

いつの間にかこちらに移動してきた五十鈴さん。その距離が異常に近く、素で焦る俺。

そして、言うだけ言って、ぷいとそっぽを向く五十鈴さん。

「あらあら、嫌われてしまいましたねえ、優理くん」

「ええっ！？ 俺のせいなの！？」

あははと笑う三人を、俺は唇をとがらせ、うらめしげに見る。

しばらくすると、昼休み終了の予鈴が鳴り、皆それぞれの机に戻っていった。

とは言っても、皆席が近いので、ほとんど変わってはいないが。唯一、五十鈴さんだけが、次の授業の先生に注意されるまで、博士にくっついていたのはご愛嬌である。

もしかしたら、今までの休み時間より疲れたかも……。

だけど、知らない他人から受ける疲労より、友達から受ける疲労は嫌いじゃないな。などと思いながら、俺は自然とこぼれる笑みと共に、午後の授業を受けるのだった。

「優理くん、ニヤニヤして、気持ち悪いですよ?」

「かなめさんヒドくない!?!」

転校生（後書き）

どうでしょう、キャラおかしくないですか？
怖いよう（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）

娣中（前書き）

長い……ですかね？

嫦中

授業の終わりのチャイムと共に、俺は再度、机に突っ伏した。
学校ってこんなに疲れる場所だっけ……？

「ヒロくん！　かなちゃん！　ユウくん！　一緒に帰ろうっ！」

五十鈴が博士にくつつきながら、声をかけてきた。

「うん、帰ろうか。目覚ましのこと、よろしくな？　五十鈴」

「ばっちりまかせといて！　ユウくんが投げても壊れない、頑丈なのを探してあげるよっ！」

「うつつ……、そのことを掘り返さないでくれよ……」

「あはは、でもびつくりだね。優理がそんなことするふうには見えないけどなあ」

「優理くんは、意外とおてんばさんなんですねぇ」

博士に続いて、かなめちゃんが頷く。

昼休みの後の休み時間も、この四人で集まって話していたので、今ではかなりフランクな感じで呼びあっている。

その休み時間で、今朝目覚ましを壊してしまった事を口にする、皆が面白い物に付き合ってくれると言っているので、お言葉に甘えることにしたのだ。

ちなみに、この時に博士がかなめちゃんに、『ハカセ』と呼ばれている理由を知った。読んで字のごとく、ということらしい。『は

かせ』と漢字で書いて『ひろし』だもんなあ、そりゃあだ名がハカセにもなるわな。まあ俺はもうすでに博士と呼んでいた^{ひろし}ので、そのまま博士と呼び続けることにした。

こんな短い時間で、よくここまで打ち解けたものだ、自分でも感心する。

「九十九君、九澄君、私達とも一緒に帰ろうよ！」

「九十九！ 九澄！ 遊びに行こう！ 歓迎会しようぜ！」

とまあ、こんな感じで、クラスメイト達からも、かなりよくしてもらっている。

「ごめん、今日は用事があるから、また今度な！」

クラスメイト達の誘いを断って、かなめちゃん達に向き直る。

「さ、行こうか。案内よろしく！」

につこり笑って話し掛けると、三人が固まる。

……何故？

「優理って、どれだけ爽やか好青年なのさ。男の僕でもドキッてしたよ」

「あら？ ハカセくん、もしかしてそっちの気があるのかしら」

「ヒロくんヒドい！ ボクというものがありながらっ！」

「俺はそっちの気はないぞ！？ 丁重にお断りする！」

「かなめさん！？ そっちの気って何！？ 五十鈴ちゃんも優理も、真に受けないですよ！ ってか、五十鈴ちゃんはなんか、言ってることがちよつとズレてるし！？」

ほんわかした空気に包まれ、俺達は、四人で笑いながら（博士は一人むくれているが）、教室を後にしたのだった。

「でもさ、なんか凄い歓迎っぷりじゃない？ 転校生ってそんなに珍しくもないでしょ？」

「うん、僕もそう思う。あそこまでチャホヤされると、戸惑っちゃうよね」

目覚ましを買いに行く道すがら、俺に対する熱烈歓迎っぷりに対する疑問を出すと、博士も、うんうんと同意してくる。

「確かにそうですね、優理くんは爽やかイケメンなので、まだわからないでもないですけど、容姿も並、性格も普通、とりわけて良いところもなさそうなハカセくんまで、あの人気、というのは、いささか疑問ですねえ」

「か、かなめさんって時々、心にグサグサナイフを突き立ててくるよね……」

かなめちゃんの刺のある言葉に、目に見えて落ち込む博士。

「が、がんばれ博士！ 良いところの一つや二つ、きっとあるさ！ た、多分……。などと、心の中でエールを送ってみる俺」

「優理……、声出てるよ……？」

「え？ で、出た？ あ、あははは……ごめんごめん」

博士はさらに落ち込み、頭を頂垂れている。なんか黒いオーラが見える気がする……。かなり足取りも遅くなっているようだ。いつ、地面にめり込んでもおかしくなさそうだなこりや……。

「大丈夫だよ、ヒロくん！ 良いところなんか一つなくても、ボクはヒロくんのことが大好きだよっ！？」

「五十鈴ちゃん……、それ……、フォローになってない……」

五十鈴があたふたしながら博士に声をかけるが、完全に逆効果のようだ。博士が蚊の泣くような声で返事をするさまを見れば、一目瞭然である。

そんな様子を、かなめちゃんは、ニコニコしながら傍観している。確か、言い出したのはかなめちゃんだったよな……。？ 結構かなめちゃんって、腹黒

「優理くん？ 今何か失礼なことを考えませんでしたか？」

「い！？ いえいえ！ 滅相もございません！」

「そうですか？ それならばいいのですが……。もし変なことを考えていたら……。ねえ？」

「そつ、そそそ、そんなわけないじゃないデスカ！ あは！ あはははは！」

こ、怖っ！？

満面の笑みではあるのだが、重圧が半端ではない。というより、笑顔だからこそ、怖いのだろう。

「ユウくん……かなちゃんは怒らせちゃダメだよ？ あの顔で怒られるんだから……。ボクは死ぬかと思ったよ……」

五十鈴がこっそりと耳打ちしてくる。なんでも昔、かなめちゃんを怒らせてしまったことがあるらしく、笑顔で淡々と説教されたらしい。

「わ、わかった。気を付けるよ……」

怒鳴られて怒られるより、満面の笑みを浮かべて怒られる方が、より恐怖心を煽るだろう。俺は生唾をゴクリと飲み干しながら、そう答えた。

「ととと、ところでさ。何処に目覚ましを買いに行くの？」

この場の空気を変えようと、必死に話題をそらす。

「娣中だよー？ あそこに行けば、なんでも揃っちゃうんだから！」

「すずちゃん、アバウトすぎますよ。優理くん、娣中というのは、娣娥中央マーケットの略称で、大きな商店街の様なものです。本当にいろんなお店がありますから、きつと気に入った目覚ましが見つ

かと思っていますよ?」

なるほど、確かに商店街なら、なんでも揃うというのはあながち間違いではないだろう。

ちなみに、ボーリング場などの、遊ぶ場所も充実しているため、かなり人気のスポットのようだ。

「まあ説明は出来ても、案内をしろ　と言われたら難しいんですけどね?　私も、高校に入る前にこちらに引っ越してきたので、何処に何があるかまでは、完全に把握しきれっていないので」

「え?　かなめちゃんも、嫦娥町出身じゃなかったんだ?」

「はい。ですから、詳しいことはすずちゃんに聞いてくださいね?」

「はいはい!　嫦娥町のことなら、ボクになんでも聞いてねえ」

「聞きたいことがあったときはよろしくお願いするよと、五十鈴に返す。」

「でも、一つだけ気を付けなきゃいけないことがあるんだ」

すると、ようやく回復したらしい博士が口をはさむ。

「気を付けなきゃいけないこと……?」

オウム返しに聞きなおす俺。

「うん、娯楽にあるお店は、六時になるとほとんどが閉店準備を始

めるんだ。七時には完全に閉まっちゃうよ？ 十時には、出歩いてる人なんか全然いなくなるしね。いるとすれば、不審者が、夜回り番の人くらいかな」

非行防止も兼ねてるみたい。五十鈴ちゃんの受け売りだけどね。と、博士が続ける。

「七時！？ マジで！？ 早すぎない！？」

「だよ、僕もそう思うよ。早めに買い物すませないと、ご飯も食べれないからね」

そうなのだ。俺は一人暮らしの為に、自炊もしくは外食をしなければならぬ。自炊は出来ることは出来るのだが、いかんせん、面倒くさが勝ってしまう為、今日は外食か惣菜を買って済まそうと思っていたのだ。

「うああ、ついでに今日のご飯も買っておかなきゃだな……」

「???? 優理くんのお母さんは、今日家には帰らないんですか？」

「あ、俺一人暮らしなんだ。両親は二人とも他界しちゃってさ？ 親戚が引き取ってくれたんだけど、ちょっとごたごたしちゃってね。それで、この嫦娥町に一人で越してきたワケ。一人立ち出来る、ちよつといい機会だしね」

「そ、そうなんですか……。ごめんなさい、失言でした……」

かなめちゃんが本当に申し訳なさそうに頭を深く下げる。

とたんに、空気が重くなる。あちゃー、俺の方が失言だったかも。両親が亡くなって、こんな場面には何度か遭遇したが、正直大嫌いな空気だ。

払拭させるために、慌てて言葉を取り繕う。

「いやいやいや！ そんなかしこまらないでいいよ！ もう慣れちゃってるし、気にしてないから！」

いや……、でも……と、うじうじだすかなめちゃん。
それなら俺にも考えがある。

「じゃあ、かなめちゃん。悪いと思ってるなら、家にご飯作りに来てよ。なんなら同棲してくれると助かるなあ」

「あ、あらあら、付き合ってもいないのに同棲なんて……、優理くんはけだものさんだったんですね……」

そう言つて、かなめちゃんはぶいと向こうを向いてしまった。

「優理！？ 突然何言い出すの！？」

吹き出しながら、叫ぶ博士。

「か、かなちゃんにそこまで言える人、ボク始めてみたよ……。ユウくんって意外と大胆なんだね……」

五十鈴は、驚きと感心が混ざったような顔をしている。

まあ何はともあれ、目論み成功！ 今までの暗い雰囲気から打って変わって、明るい空気が戻ってきた。

でも、そっぽを向く前のかなめちゃんの顔が赤かった気がしたん

だよなあ。気のせいかな……？

目覚ましを買い終わり、惣菜を買ったためにスーパーに行こうとしていると、博士がこう切り出した。もし優理がよかったら、今日家でご飯食べない？ と。

「そりゃ、喜んで行きたいけど……迷惑じゃない？ ご家族とかにさ？」

「そんなことないよ！ むしろ家の妹が迷惑かけるかもしれないぐらいだし」

「え？ 博士って兄妹居たんだ？」

驚きの声をあげる俺。

いやあ、意外。てつきり一人っ子だと思ってたもんなあ。

「マナちゃんって言うの！ とおっつても可愛いくて、優しいんだよ！」

「そんなことないよ？ 五十鈴ちゃんの前ではそう振る舞ってるかもしれないけど、家の中じゃ酷いんだから……」

「ハカセくん？ 妹さんの悪口は良くないですよ？」

「うっ……。そうだね、ごめん」

うんうん、素直に謝れるのはいい事だよ、博士。なんだ、良いところあるじゃん。

「まあとにかく、ほんとにお邪魔でないなら、お呼ばれさせてもらおうかな」

「もちろん！ 大歓迎だよ！」

「ええー！？ ユウくんずるいい！ ボクもヒロくん家でご飯食べたいようー！」

「ダメですよ、すずちゃん、邪魔をしちゃ。ハカセくんは、そういう体で優理くんをお持ち帰りしようとしているのですから」

「なっ……！！？ そうだったのか博士！ お前って奴は……！！」

「ええええー！？ ダメだよヒロくん！ ユウくんをお持ち帰りするくらいなら、ボクをお持ち帰りしてよっ！」

「だからかなめさん！？ 違うつて学校でも言っただでしょ！？ 優理もわかってて悪ノリしないでよ！ 後、五十鈴ちゃんはやっぱりズレてるからね！？」

そしてやっぱり、四人で笑いあうのだった。（無論、博士はむくれていたが）

娣中（後書き）

元ネタを知ってる人は、この話で何故作者が二次創作を書きたくな
ったかがわかるハズ。。。

九澄家での一時（前書き）

ライブに行ったわけでもないのに、首がむちうち……。皆様もカラオケでのハツチャケ過ぎにはご注意ください

九澄家での一時

八朔の木が生い茂る中を、俺達三人は歩いていた。

娣中で買い物を済ませたあと、かなめちゃんの家の方角が違うという事なので、途中で別れ、今は博士と五十鈴に着いて行っている状況だ。

「そういえば、この町に来てずっと不思議に思ってたんだけど、八朔の木がやたら多いのはなんでなんだ？」

「あれえ？ ユウくん知らなかったの？ 娣娥町は八朔の名産地なんだよお？ はっさくはっさく、娣娥の八朔うゝ って歌ってるCM見たことない？」

五十鈴の言葉に、そんなCMをテレビで見た気がするのを思い出した。狼の着ぐるみが踊っていて、かなりシニールな光景だった気がするが。

「なるほどねえ、だからニュースで、八朔の事を心配してたのか」

「そうなんだよお、今年は八朔の数が少ないから、八朔祭りがちゃんと出来るかどうか心配なんだあ……」

「「八朔祭り？」」

俺と博士が、全く同時に疑問の声をあげる。

「そか、ヒロくんも初めてなんだっけ。じゃあボクが説明してあげるよー！」

そう言って、五十鈴は八朔祭りについて、説明してくれた。

要約すると、八朔祭りとは、嫦娥おおかみさまの町に古くから伝わる祭りで、大神様と呼ばれる神様に、豊作祈願と収穫のお礼を捧げる祭事だという。

嫦娥町は娯楽が少ない為、町中の人達はこの祭りをかなり楽しみにしているらしい。

メインの催しとして、『願い事を書いた紙を差し込んだ八朔を、坂道や階段などから転がして拾う』というものがある。

拾った八朔に書かれている願い事は、その八朔を拾った人に叶うのだという。

その為、皆必死に八朔を拾う。野球のキャッチャーばかりを集めたチームを結成する人や、八朔を拾う用のロボットを開発する人までいるらしい。……どんだけだよ。

「そんなワケで、八朔祭りは嫦娥の人達にとって、一大イベントなんだよ！」

「へえー、そんなに熱く語られると、俺もわくわくしてくるなあ」

「でしょでしょ！？ 出店も美味しいものがたくさんあるんだあ」

「五十鈴ちゃん、よだれよだれ」

「あわわわっ！？」

じゅるりとよだれをたらす五十鈴。博士に指摘され、慌てて口元をゴシゴシと拭う。

そんなこんなで歩いていると、二人は団地に入って行った。

……ん？

「なあ博士。今博士の家に向かって歩いてるんだよね？」

「ん？ うん、そうだよ？」

「五十鈴も家に帰ってるんだよね？」

「何言ってるのユウくん。そんなの当たり前じゃん」

「ってことは……まさか。」

「もしかして、二人ともこの団地に住んでるのか……？」

「「そうだよ？」」

キレイにハモって、返事が帰ってくる。

「あー、まあ……その、なんだ。頑張れよ、博士」

「え？ 何が……あ、ああ。そういうことか」

ちらりと五十鈴を見て、苦笑いを浮かべつつも、納得する博士。

「ちょっとユウくん！ それどおいう意味なの！？ ヒロくんも何に納得してるのさあ！」

ぷつと頬を膨らませ、ぷりぷり怒る五十鈴。姿は可愛いのだが、どうやらちよつと本気で怒っているようだ。

なんとかしてくれ、と、博士にアイコンタクトを送る。

「ごめんごめん、明日アイスクリーム奢るからさ！ 機嫌直してよ、五十鈴ちゃん」

「えっ！？ アイスクリーム！？ わぁーい 約束だからねヒロくん！」

じゃあ明日に備えて早く寝るね！ おやすみーと、五十鈴は、叫びながら走り去った。

な、なんて変わり身の早さだ……。

「ありがとな、博士。助かった」

「これくらいどうってことないよ。かなめさんに、『すずちゃんは何で釣れ』っていうアドバイスを聞いてなかったら危なかったけどね」

頬を人差し指でポリポリ掻きながら言う博士。こりやかなめちゃんにも感謝しとかなきゃだな。

「さ、僕らも帰ろうか。もう家もすぐそこだし」

「うん、ご馳走になります」

そうして俺達も家に向かって歩き出した。

「ただいまー」

「お帰り！ 遅あい！！ 今日はお兄ちゃんが当番なんだから、早くご飯作っ…………て…………」

奥から車椅子に乗った女の子が、かなり機嫌悪そうにこちらに出迎えに来て、俺の顔を見た途端に固まる。

なんだろう、デジャヴを感じる……。

と、とりあえず、挨拶しておこう。

「こんばんわ、君がマナちゃんかな？ 突然お家に来ちゃってごめんね？ 驚かせちゃったかな？」

俺は、たぶんこの子が博士の妹、マナちゃんなのだろうと予測し、声をかける。

ロングの黒髪をストレートに伸ばし、まだあどけなさの残る顔には似合わず、どこか大人びた雰囲気を持っている女の子だ。五十鈴が可愛いというのも納得である。

「え、あ、えと。こんばんわ！ ちょっと失礼します！ お兄ちゃん！ ちょっとー！」

言うや否や、博士の手をとって、奥に引っ張りこむマナちゃん。器用に車椅子を扱うさまに、思わず感心してしまう。

「お兄ちゃん！ あのかっこいい人なんなの！？」

「なにつて……、今日転校してきた、九十九優理君だよ」

「そうじゃなくて！　なんで一緒に帰ってきてるのって聞いているの！」

「ああ、今日一緒に晩ごはん食べる約束したからね、家に招待したんだよ」

「ええ！？　それならそうだって連絡入れてよ！」

あたしだって準備があるのに……と、ブツブツ言うマナちゃん。
というか、小声では話しているのだが、丸聞こえである。なんだから家にあがりにくい雰囲気だ。

「えーと……、また今度にしようか？」

「！！　あ、全然大丈夫です！　あがってゆっくりしててください！！」

声をかけると、マナちゃんが中に入るよう促してくれた。

「お兄ちゃん、早くあがってもらいなよ！　九十九さん待たせちゃ悪いじゃない！」

「マナが引つ張ってきたせいじゃないか」

「何か言った！？」

「な、なんでもないよ……。優理、とりあえずあがって？」

大丈夫なのだろうか……。俺はおそろおそろ、靴を脱いで、お邪魔しますと家にはいる。

「お兄ちゃん、あたしちよつと部屋に行ってくるから」

「ん、わかった。じゃあご飯出来たら呼びに行くよ」

「いいよ、すぐ出てくるから。九十九さん、ごゆっくりどうぞ」

「ありがとう」

につこり笑って返すと、マナちゃんは顔を赤くして、いそいそと部屋に入ってしまった。

「……優理って、天然の爆弾だよね」

「なんだよそれ……？」

「わかってないから、余計にたちが悪いしね」

けらけら笑う博士。どういふことなんだ……。わけがわからん。

「じゃあご飯作るから、テレビでも見ながら待っててよ」

「博士が作るのか？　そういえば、親御さんを見かけないけど……、もしかして博士も……？」

「いや、確かに母さんは居ないけど、父さんは部屋にいますと思っよ？　って言っても、母さんは別居中ってだけで」

「べつ……！？ 悪い、野暮なこと聞いたな」

「あはは、気にしないで？ ほんとにうちの父さん甲斐性ないからねえ」

「そ、そうか。あ、ご飯作るなら手伝うぞ？」

流れを変えるために、手伝いを申し出る。俺がこの空気を嫌いなように、博士もあまり好きではなさそうに見えたからだ。

「ええ！？ いいよ！ お客さんだからゆっくりしてて？」

「さすがに気が引けるよ。俺も一人暮らしで料理作ったりするから、腕をあげときたいってのもあるしな？ サボつてると腕が落ちるんだよ」

博士は渋っていたが、俺のためにもなると説得すると、手伝いを了承してくれた。

今日はカレーにするとということなので、俺はジャガイモの皮を剥きにかかった。

「九十九さんって料理もできるんですね……？」

するとジャガイモの皮を剥き、適当な大きさに切っていると、いつの間に部屋を出てきたのか、マナちゃんが俺の手つきを観察していた。

「あ、あたし九澄マナ（くずみまな）って言います。お兄ちゃんがお世話になってます」

マナちゃんは先程とは違う服装で、可愛い、大きな白い帽子をかぶっていた。

「九十九優理だよ、よろしくね？ マナちゃん。まあ、俺って一人暮らしだからね、多少の料理スキルがないとマズイんだよ」

「九十九さん一人暮らしなんですか！？」

「まあね？ とは言っても、なんでもできるわけじゃないけどね」

「いえいえ、その時点で、お兄ちゃんとは天と地の差がありますよ！」

「……マナ。料理の邪魔しないでくれる？」

「別に邪魔してないもん」

兄妹の目から、火花がバチバチ出ているのが見える気がする……。

「僕は優理に迷惑かけないでって言ってるの！」

「……っ！！ 九十九さん、あたし迷惑ですか……？」

「え？ いや、そんなことないよ？」

「ほらお兄ちゃん！ 九十九さんだって迷惑じゃないって言うてるじゃん！」

「優理が気を使ってくれてるだけだよ！」

まさに一触即発。危うい空気がぶんぶんしている。ちなみにカレーは、博士が言い合いに夢中になっていたため、俺がたんたんと作っている。もうルーも入れ終わったし、後は煮込むだけだな。

ついでにポテトサラダでも作っとくか。

鍋を火にかけ、茹で上がったジャガイモを潰し、薄切りにしたきゅうりと玉ねぎを入れ、マヨネーズと塩コショウで味をつけて……と、完成　サラダを作っている間にカレーも煮込み終わったみたいだ。

「なによ!」

「なんだよ!」

料理を作りながら放置してれば、喧嘩も終わるだろうと思っていたのだが、逆にヒートアップさせてしまっただけのようだ。

どうしたもんかと頭を悩ませていると、奥の部屋がガチャリと開き、髪の毛がボサボサの、無精髭を生やした男性が歩いてきた。

「んー、いい匂いだ。今夜はカレーかい?　っと……君は……?」

「えと、お邪魔してます。博士君のクラスメイトで、九十九優理と言います。今日は博士君に夕食に誘っていただいたので……。ご迷惑おかけします」

「ああ、博士の同級生かい?　いやいや、いつでも遊びに来てくれて構わないよ。博士も引越してきたばかりで、友達も少ないだろうから、仲良くしてやってくれないかい?」

「はい!　もちろんです!」

「僕は九澄^{くすみなあき}正明、博士と……マナはもう知ってるかな？ 二人の父親をやらせてもらってるよ」

喧嘩中の二人をちらりと見て、苦笑いを浮かべながら自己紹介をされる。

「ほら、博士、マナ。いつまでやってるんだ。お客さんに失礼だろう」

「二人とも、ご飯出来たし、早く食べよう？」

博士とマナちゃんは、正明さん、次いで俺、最後にカレーの鍋を見るとばつが悪そうに席に座った。

俺はそのまま、四人分のカレーを盛る。

これじゃ、どっちが九澄家の人間かわからないかと、心の中で苦笑する。

「はい、どうぞ。召し上がれー」

「……いただきます」

三人が一斉に食べ始める。

正明さんが、学校はどうだった？ とか、当たり障りのない話を口に出している。

そういえば、大勢で食事するのも久しぶりだななどと、俺は一人ごちる。

「ごめんね、優理。来てもらったのに料理作らしちゃって……」

「ん？ 気にすんなって。それより味はどうだ？」

「すごく美味しいよ！　ほんとに優理はなんでも出来そうだね」

と、博士。

「九十九さん、すごく美味しいです！　……たまに家に来て作って
もらっちゃダメですか……？」

「こらこらマナ。九十九君に無茶を言うんじゃないよ。それにして
も、このカレーは九十九君が作ったのか？　ほんとに旨いなあ」

続いてマナちゃんが口を開き、正明さんがそれを咎める。

「俺でよければいつでも来ますよ？　また是非呼んでください」

マナちゃんが嬉しそうに、わあい　と声をあげ、しばらく四人
で談笑を楽しむ。

かちやかちかと、スプーンと皿が触れあう音を聞きながら、俺は
まだ両親が生きていた頃を思い出しながら、食事を楽しんだ。

バーベキュー1（前書き）

今回はかなり短め。。。。

バーベキュー1

朝。チュンチュンと雀のさえずりが聞こえる。

今日は日曜日で、学校は休みだ。

にも関わらず、俺は早起きして、出かける準備をしていた。

なぜかと問われれば、それは昨日の放課後に遡らなければなら
ないだろう

～土曜日の放課後～

「ねえねえ、ユウくんは明日暇？」

放課後、いつものように、俺、博士、かなめちゃん、五十鈴の四
人で娯楽中に遊びに来ていた。

お腹も減ってきていたので、近くの喫茶店に入り、休憩していた
矢先に、五十鈴が予定を聞いてきた。

「んー？ 暇だけど、どしたの？」

「明日みんなで、バーベキューするんだあ よかったら、ユウく
んもどうか？ って思ってた！」

「優理もおいでよ！ マナも誘うし、みんなで行った方が楽しいと
思うよ？」

「そうですねえ、優理くんもいた方が、いろいろと楽しめますし。
ふふふ」

博士の言い分はわかるけど、かなめちゃん、何を楽しむ気ですか……？含み笑いがものすごく怖いんですけど……。

「ま、まあ暇だし、全然いいけど」

「じゃあ決まり！ 明日の朝に迎えに行くね 寝坊しちゃダメだよ？ ユウくん！」

「任しとけ！ 新しくなった俺の目覚ましに死角はない！」

とまあ、こんなわけで、俺は休みの日にも関わらず、早起きして準備中、というわけだ。

「うっし、このくらいで充分だろ！」

少し大きめのリュックに、食材等々を無理矢理詰め込んだため、かなりぱんぱんだ。

もっじき迎えに来る時間なので、俺は急いで玄関を出た。

「そろそろ来てもいい頃だよなー？」

家の前で、キョロキョロしながら待っていると、一台の車が目の前に止まった。

「やつほお ユウくんお待たせ！ さ、乗って乗って！」

後部座席の窓を開けて、五十鈴が手招きをする。

「おはよ、五十鈴。えっと、一誠さん……でしたっけ？　今日はよろしく願います」

もうすでに、俺以外のメンバーは揃っていた。博士は助手席、その後ろに並んで五十鈴とマナちゃん。最後尾にかなめちゃんが座っており、口々にはようと声をかけてくる。俺はみんなに挨拶を返したあと、運転席に座る、優しそうな雰囲気青年に声をかけ、かなめちゃんの横に乗り込む。

「君が優理君だね？　五十鈴から話は聞いてるよ。うん、たしかに爽やかな好青年だね。人気がある理由がわかるよ」

この人は、摘花つむはな一誠いっせいさん。五十鈴の兄にあたる。落ち着きがあつて、物腰の柔らかそうな、紛う事なきイケメンである。なんでも、一誠さんファンクラブまであるそうなので、相当な人気だ。

「こんな常識のありそうな人が、五十鈴のお兄さんなんて……」

「ユーウーくーんーっ！」

俺の言葉に、反論の声をあげる五十鈴。

「優理くん。一誠さんは、一見普通ですけど、よくよく見ていけばすずちゃんのお兄さんだってわかりますよ？」

「かなちゃんまでっ！？」

五十鈴はがつくりと頂垂れ、ボクっ为一体……と、いじけモードに入ってしまった。隣のマナちゃんが必死に慰めている。

……悪いけど、五十鈴のことはマナちゃんに任そう。

「おや？ その言い方だと、まるで俺が五十鈴と同じで、普通じゃないって言ってるように聞こえるよ？」

「あら？ 一誠さん、御自覚がなかったんですか？」

かなめちゃんの言葉に、これは手厳しいなと苦笑する一誠さん。
……って言うか、かなめちゃん？ 朝から全開じゃないですか……。

「優理くん、何か……？」

「い、いやあ、かなめちゃんは今日も可愛いなあと思って。あは、あははは……」

「ありがとうございます。でも、褒めても何も出ませんよ？」

ふふふと笑うかなめちゃん。

……目がまったく笑ってないのが、めちゃくちゃ怖い。

「お、お兄ちゃん。これ……」

「ば、ばか！ 喋るんじゃない、マナ！ 今会話に参加したら、火傷どころじゃすまなくなる！」

コソコソと、小声で話す九澄兄妹。

博士、てめえ……。あとで覚えてろよ……？

しばらくすると五十鈴も立ち直り、六人で談笑しながら、目的地

を目指す。

「ってか、バーベキューって何処でするんだ？」

そういえば目的地で思い出したが、バーベキューをするとしか聞いていなかった俺は、場所はどこのかと疑問の声をかける。

「五十鈴、優理君に言ってなかったのかい？」

「あはは、忘れてた。ごめんおにい」

「謝るのは俺じゃなくて優理君に、だろ？」

一誠さんに言われ、それもそうかと、五十鈴は俺に謝罪をする。

「まあ別に謝るほどの事でもないんだけどな……？　それより、結局何処なのさ？」

「いつもボクたち家族がバーベキューしに行ってる河原があるんだよ！」

「すごく綺麗な所だから、皆気に入ってくれると思うよ？」

五十鈴の言葉に補足するように、一誠さんが声を重ねる。

「なんだかんだ言ってるうちに、もう着いちゃったけどね？　ほら、ここだよ」

そう言っ、一誠さんは車を止めた。

車を降りた俺は、その光景に息を飲んだ。

バーベキュー1（後書き）

ま、まだ事件すら起こってない……。早く書かなきゃ……。

バーベキュー2（前書き）

まだまだ先は長い……

バーベキュー2

見渡す限りの緑の木々。その中に、太陽の光を反射し、キラキラと輝く清流。幻想的と言っても過言ではない光景に、俺は感動すら覚えた。

「すげえな……」

「綺麗ですね……。言葉がでないくらいに」

隣でかなめちゃんが呟く。川の反射光に照らされ、長い髪を指で耳にかけながら、眩しそうに目を細めるかなめちゃんの横顔は、この光景に負けないくらい綺麗で

「どしたの優理？ 顔赤いよ？」

「うおあつ！？」

いきなり博士に声をかけられ、思わず変な声がでる。

「な、なんだよ博士！？ いきなり声かけるなよ！ びっくりするだろ！？」

「え、あ、うん。ごめん……？」

「はあ……。お兄ちゃん空気読みなよ……」

マナちゃんは博士を見て、やれやれといった風にため息をついた。多少はゴツゴツしている地面だが、このくらいなら車椅子のマナ

ちゃんでも、難なく移動出来るだろう。

「おーい、そろそろ準備するから手伝ってー」

一誠さんに呼ばれ、俺達は車のトランクの方に移動した。

どうやら、作業ごとに班分けをするようだ。一誠さんの指示で、かなめちゃんとマナちゃんが野菜の下ごしらえ、一誠さんが道具の組み立て、薪拾い。俺と博士と五十鈴が食料調達係となった。

……って、食料調達……？

「はい、これ。がんばってね？ 三人とも」

そう言つて一誠さんに渡されたのは、三本の釣竿。

あー、これはあれか？魚を釣れと、そういうことなのか？

「えっと……一誠さん？ どうして釣竿なんか……？」

「いやあ、なんだか五十鈴のやつ、昨日見た釣り番組に感化されちゃったらしくてね？ 『食料は現地調達だあ！』なんて言い出したもんだからさ」

ちらりと横を見ると……あれ？いねえ！？

いつの間にか、博士の手をとって随分先に行ってしまった五十鈴が、ユウくん早くー！ と、こちらに向かって手を振っている。

「お肉は持ってないんですか？ あれだつたら俺も多少は持ってきてるんですけど……」

「あはは。大丈夫だよ！ 人数分の魚なんて、とてもじゃないけど釣れないだろうから、ちゃんと持ってきてるよ」

俺が心配そうに言うと、一誠さんは笑って答えた。
なるほど、それなら問題なさそうだ。

「優理くん、ちょっといいですか」

かなめちゃんに手を引かれ、俺はどうしたのかと問う。

「お肉があることは、ハカセくんには内緒にしておいてくださいね」
「？」

「ん？　なんで……って、そういうことが」

ニコニコと、裏がありそうな笑みを浮かべるかなめちゃんを見て、
ピンときた俺は、同じようにニヤリと笑う。

「話が早くて助かります」

「了解！　それじゃ、行ってくるよ」

行つてらっしゃいと声をかけてくれる三人を背に、俺は博士たち
のもとに歩き出した。

くっくっく……、覚悟しろよ博士。車の中での怨み、今こそ晴ら
してくれるわ！

「釣れないねえ……」

五十鈴の言葉に、男二人が頷く。

二人に合流したあと、俺は沈痛な面持ちでお肉がないことを伝えた。

五十鈴は慌てふためき、博士は愕然としていた。（五十鈴が知らなかったのは俺もびつくりしたが）

そんなこんなで、必死に釣ろうとはしているのだが……、それほど簡単に釣れるわけもなく。かれこれ三十分ほど釣糸を垂らしている最中だ。

真実を知っている俺としては、最初こそほくそ笑みながら見ていたわけだが、これだけ時間がたつてくると、さすがに飽きてくる。欠伸を噛み殺しながら釣りの真似事をしてしていると、五十鈴が声を出した……というわけだ。

「あーっ！ もう無理い！ 全然釣れないよおっ！」

竿を投げ出し、手足を広げて、ごろんと河原に寝転がる五十鈴。

「五十鈴ちゃん、気持ちはわかるけど、釣れなきゃご飯、野菜だけになっちゃうよ？」

「それはそうだけど……、もうボク飽きちゃったよお」

博士の言葉に、不満気な顔を隠そうともせずと言う五十鈴。

というか、飽きたって……。もしほんとにお肉がなければ、大惨事なんだけども……。まあ実際は、お肉があるから、俺もこれだけ冷静でいられるんだが。

と、その時だった。

投げ出した五十鈴の竿が、ズズと河の方に引っ張られる。

「五十鈴！ 当たりだ！ 竿を拾え！」

「え！？ え！？」

咄嗟に俺が叫ぶも、完全に寝転がっている五十鈴では、反応に遅れ、間に合わない。

五十鈴、博士、俺の並びで釣っているため、俺でも間に合わない。必然的に博士に叫ぶ。

「博士！ 五十鈴の竿を拾え！」

「っ！ わかった！」

博士は自分の竿を放り出し、五十鈴の竿に飛び付く。

「くっ……！？ 間に……合えええええ！」

叫びながら、河に竿が落ちる寸前、間一髪で竿を手にする博士。

「やった！？ 拾えたよ優理！」

「まだ気を抜くな博士！ フッキングして合わせろ！」

「ふっ……！？ 何それ！？」

「ええい！ とりあえずおもいつきり竿を引っ張れ！」

言われるがまま、博士は竿を引っ張る。

「よし！　あとは慎重に魚を持ってこい！」

博士はソロソロと糸を引き、ついに魚を釣り上げた。

「つ、釣れた……。やったよ優理！」

「ああ、ちゃんと見てたよ。よくやった博士！」

「うん！」

嬉しさを全面に出しながら、へなへなと腰が抜けたように座り込む博士。

そこへ、固唾を飲んで見守っていた五十鈴が、博士に飛び付く。

「すごかったよお！　ヒロくうーんっ！」

「わっ！？　ちょっ！　五十鈴ちゃ　」

博士の体が、五十鈴の勢いでぐらりと傾き

ばっしやあああん！

二人仲良く、河にダイブしたのだった。

バーベキュー2（後書き）

どうでしたか？変じゃないことを祈ります。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1888y/>

おおかみかくし～The story of another world～

2011年11月20日18時01分発行